

龍音の会
〜森田光春師を偲んで〜
相原一彦

能清経
恋之音取
森本哲郎

能三輪
白式神楽
片山九郎右衛門

神々の荘厳なる光と闇

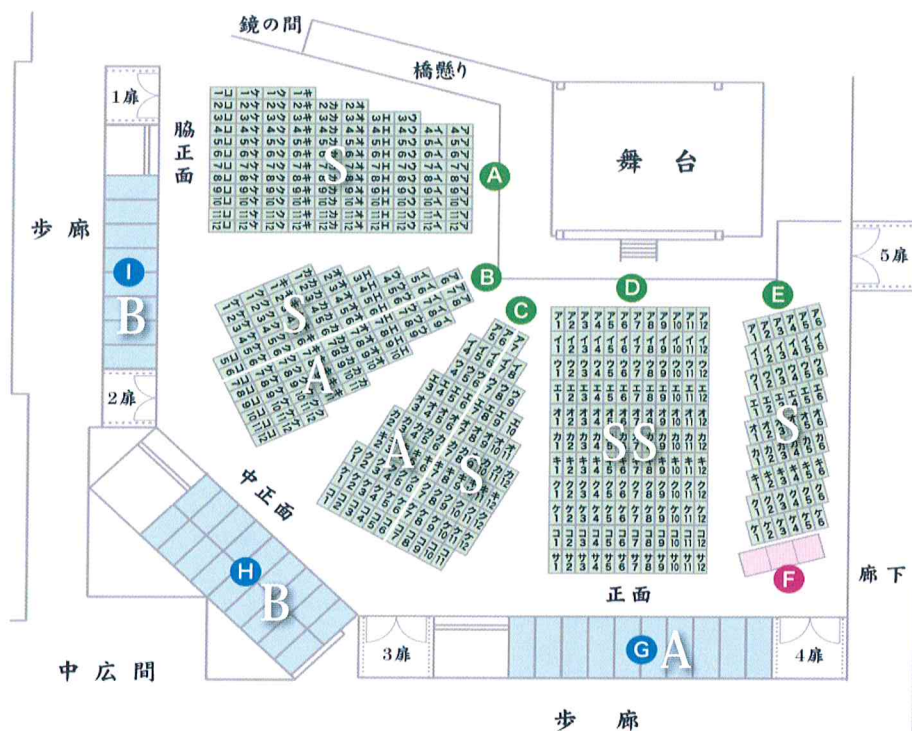
平成28年6月19日(日)11時開演(10時開場)17時終演(予定)

福岡市中央区大濠公園1-15 電話 092-715-2155
大濠公園能楽堂

主催：龍音の会・相原一彦 補佐：杉市和 後援：福岡県・福岡県教育委員会・福岡市・福岡市教育委員会
お問合せ：シアターネットプロジェクト 092-739-2318

〈大濠公園能楽堂 観客席 配置図〉

● 能楽堂の客席は「見所(けんしよ)」といいます。舞台を囲み、三方に席が並んでいます。●



〈大濠公園能楽堂までのアクセス〉

地下鉄でお越しのお客様

【S-1】大濠公園駅
【S-2】唐人町駅から徒歩7分

西鉄バスでお越しのお客様

【B-1】大濠公園バス停から徒歩3分
【B-2】黒門バス停から徒歩3分
【B-3】大濠公園南バス停から徒歩15分〜20分

お車でお越しのお客様

【C-1】大濠公園有料駐車場

駐車料金

普通車 最初の2時間 220円 以後30分毎 160円
中型車・大型車 最初の3時間 1,530円 以後30分毎 250円

お問い合わせ 大濠公園・西公園管理事務所 092-741-2004

入場料金のご案内

チケット発売日 平成28年3月1日(火)

SS指定席 13,000円 | S指定席 12,000円 | A指定席 10,000円 | B自由席 8,000円

学生自由席(大学生) 5,000円 | 学生自由席(小中高生) 3,000円

チケット
取扱い

チケットぴあ ☎0570-02-9999 【Pコード:447-607】 劇ナビ@FUKUOKA <http://gekinavi.jp>
ローソンチケット ☎0570-084-008 【Lコード:84116】 シアターネットプロジェクト ☎092-739-2318
大濠公園能楽堂 ☎092-715-2155 相原一彦 ☎090-5674-6872

龍音の会

森田光春師を偲んで

舞囃子

百 萬 久保 誠一郎

大鼓 白坂 保行
小鼓 横山 幸彦
太鼓 吉谷 徳和 潔

井内 政徳

今村 嘉伸

多利 久島

味方 玄

能

清経の妻 今村 嘉太郎

平清経の霊 森本 哲郎

清 経

大鼓 柿原 光博
小鼓 幸正 佳苗

相原 一彦

恋之音取

後見 今村 一夫

井内 政徳
山口 剛一郎
鷹尾 維教

後見 山本 博通

馬久保 誠一郎
河村 和重

（休憩）

仕舞

小袖曾我

井内 政徳
山口 剛一郎

松 風

坂口 信男

花 筐

多利 久島
今村 嘉伸

阿 漕

今村 嘉伸

善 界

鷹尾 維教

浦田 保親

上田 拓司

青木 道玄

味方 玄

地謡

地謡

舞囃子

今村 一夫

大鼓 白坂 保行
小鼓 飯富 章宏
太鼓 田中 敏達

一管

森田 光廣

地謡

井内 政徳
山本 博通
河村 和重
鷹尾 維教

融

隠 狸

狂言

太郎冠者 野村 万禄

主 吉住 講

後見 吉良 博靖

仕舞

笠之段

青木 道喜

実 盛

大江 又三郎

野 宮

河村 和重

善 知鳥

山本 博通

今村 嘉太郎

森本 哲郎

地謡

坂口 信男
馬野 正基

江 口

一調 一管
大槻 文蔵

横山 晴明

（休憩）

能

三 輪

前シテ 里女
後シテ 三輪明神

片山九郎右衛門

大鼓 白坂 信行
小鼓 大倉 源次郎
太鼓 前川 光長

白式神神楽

里人 野村 万禄

後見 山口 剛一郎

地謡

今村 嘉太郎
村保 誠一郎
上田 拓司

青木 道喜

地謡

今村 嘉太郎
村保 誠一郎
上田 拓司

味方 玄

浦田 保親

今村 嘉伸

味方 玄

ご挨拶

相原 一彦

この度、杉市和先生のお許しを頂きまして、森田光春先生を偲ぶ会を催させて頂きます。

森田先生とわたくしが辰年生まれということ、また、師のお笛の銘が【青龍】でありましたので、「龍」の一字を頂き『龍音（たつね）の会』とさせて頂いたました。森田先生が特に思い入れがあった曲が「三輪」であり、さらには師の最後の舞台となったのが「清経」でありましたので、今回、この二曲をお手向けの思いを込め、片山九郎右衛門師と森本哲郎師とに舞って頂きます。

また、杉先生には龍音の会を発足する時からただならぬご助力を賜り、今回はご無理を申して「江口」を一調一管にてお勤め頂きます。

小生なにぶん未熟者でございますが、師の名に恥じぬよう一生懸命に吹かせて頂きますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

《森田 光春》 大正五年～平成四年

能楽師森田流笛方。京都囃子方同明会（理事長）、日本能楽会（理事）、能楽協会（京都副支部長）を歴任。重要無形文化財（総合認定）保持者。勲五等双光旭日章を受章。紀伊徳川家の御能御用をつとめた森田流の分家である森田柵内家の四代目として大阪市に生まれる。京都帝国大学卒業。三老女を含むほとんどの現行曲を勤める。戦後京都に活動の場を移し、平安神宮においての京都薪能の立ち上げに尽力し、能楽の普及に努めた。永らく流儀の重鎮として活躍し、数多くの能楽師に笛の手ほどきを行う。『森田光春後援会』として三輪誓納や大原御幸等の能の秘曲を開催。

平成四年六月に病をおして清経披露之出端（金剛流を勤めあげた。この清経が師の最後の舞台となる。著書に『能楽覚え書き帖』や『森田流奥義録』（編纂）

《相原 一彦》

能楽師森田流笛方。重要無形文化財（総合認定）保持者。

昭和三十九年生。同志社大学卒業。大学一年目に森田光春師に入門。昭和六十年に玄人弟子となる。平成四年に森田師が亡くなり、杉市和師に師事する。

乱、石橋、道成寺など披露。三十年以上京都を活動の場としていたが、福岡に移籍し九州一円で主に演奏を中心として活動中。

◆あらすじ

【清 経 恋之音取】

平清経の家臣、淡津三郎はひそかに一人で九州から都へ戻って来ます。清経は、平家一門と共に都落ちし、西国へと逃れますが、前途を絶望して、豊前国（福岡県）柳ヶ浦で、船から身を投げて果ててしまっています。三郎は、その形見の黒髪を、清経の妻に届けるために戻って来たのでした。その話を聞いた妻は、自分を残して自害するとは、あんまりだと嘆き悲しみます。そして形見の黒髪も見るに忍びず、涙ながらに床につくと、夢の中に清経の霊が現れ、妻に呼びかけます。清経は、都を落ちた平家一門が筑紫での戦にも敗れたこと、敗戦の恐ろしさ、不安を話して聞かせ、望みを失って、月の美しい夜ふけに西海の船上で横笛を吹き、今様を謡って入水したことを物語ります。続いて修羅道の苦しみを見せますが、実は入水に際して十念を唱えた功德で成仏し得たと述べ、消えてゆくのでした。

今回は〈恋之音取〉の特別演出となり、シテ登場前に笛方が地謡座の前に出て、笛が吹き出して幕が上がります。笛の音とともに歩み、笛の音が止まればシテの歩みも止まる。橋掛中央にて笛が恋之手という譜を吹き出すとシテはシヨル型（泣く様子を表現する型）をします。その後、最後の譜を吹き終え、シテは常座で謡い出します。常は「聖人に夢なし」と謡いますが、音取の際は「假寝（うたたね）に恋しき人を見てしより」となります。

※清経恋之音取は、笛 シテ共に大きに口伝なるも、此の音取は弔いの心にて勤むるが本意なり。シテ方も、弔いの笛にひかされて妻を憶ひ昔を偲び、幕ばなれより少し面ぶせに出る心特大切なる事也。

：『千野の摘草』より

【三 輪 白式神神楽】

三輪山に庵室を構える玄賓僧都（げんぴん）のもとへ、毎日、関伽の水を持ってくる女がいました。玄賓は素性を尋ねると、秋の夜寒をしのぐ衣を賜りたいと願い、玄賓が快く与えると、「我が庵は三輪の山もと。恋しくば訪らひ来ませ杉立てる門」という歌の通り、その杉立てる門を目じるしにおいて下さい、と言い残して姿を消します。（中人）玄賓が女の言葉を頼りに訪ねると、神木の杉に与えた衣が掛かっており、その裾に「三つの輪は清く淨きぞ唐衣。くると思ふな取ると思はじ」という一首の和歌が記してありました。やがて杉の木陰から御声がして三輪明神が現れます。そして神話を語り、更に天照大神の岩戸隠れの時に舞われたという神楽を奏しますが、夜明けと共に消えてゆくのでした。

「白式神神楽」は、関白鷹司政通が自身の還暦祝いに「三輪」の〈誓納〉を勤めるよう、五代目の片山九郎右衛門豊尚に望みましたが、この小書は、家元の一子相伝であり辞退したところ、それならば〈誓納〉に匹敵する小書を作るようにとの事で、在京の囃子方も参画して〈白式神神楽〉という小書を作成、嘉永二年（一八四九）に初演したものです。

主催／龍音の会・相原 一彦 補佐／杉 市和